

2003年1月9日最終講義記録

## やり残したこと

阿 部 耕 一 朗

(受付 2003年5月7日)

はじめに一テーマの幕引きに寄せて

- I. 日本科学技術情報センターでの仕事始め
- II. 大阪万博跡地利用計画
- III. 大学内の黒板のスクリーン化
- IV. ユーロ=セントリズムの決算

おわりに

はじめに一テーマの幕引きに寄せて

私は1957年に広島大学大学院修了後、日本科学技術情報センターに入所し、以来30年間学術文献のデータベースを編成する業務などに携わってきました。しかし、入所までの道のりは非常に厳しかったのです。それも1950年代後半は就職状況が現在よりもはるかに厳しく、あまり人前で口に出して言ったことはありませんが、在籍していた特殊法人に入所する前には朝日新聞と岩波書店に入社願いの手紙を出しました。ところが、その当時はまだ新制度の大学院ができて3年程度しか経っていなかったため、どこの会社も新入社員採用の際には4年生大学を卒業した者しか取らず、大学院修了者の場合は一般的に過剰学歴とされることが多かったのです。そのような状況で働く場がなく困っていた時、私の指導教員が台北帝大で教鞭を取っていた時に学生だった人が学術会議事務局の課長を務めていました。そのようなことがあってか、その当時、日本もあらためていわゆる人類の知的財産、即ち学術情報を首尾良く利用しようとしていました。第二次世界大戦期、日本は「情断」という、国内に入る情報が全て遮断されていたため、学術情報に関しても他国よりかなりの落差がありました。その状況を

受け、日本学術会議が調査してみると FID (Federation International Documentation) という UNESCO (国連教育科学文化機関) の副次委員会が見付かりました。当時、国内の高度経済成長期以前であったためでしょうか、所有できる外貨が制限され、外貨所有額は UNESCO の国内委員会に決められていました。FID がワシントンで国際会議を開催する時、私が予算委員会に諮問すると旧大蔵省の主計官に「FID とは何だ」と言われ、それはもとがフランス語だからそのように表記せざるを得ないことを伝えても「どうして FID を英語にしないのか」と返される始末でした。面白いことに、当時国際機関の名前は英語ではなくフランス語で表記することが主流となっていたようです。そのような FID の活動を考慮に入れた上で日本の学術会議は、参加を決め、当時で言う先進国に国立の学術情報センターが存在するという背景があって、通産省、農林省、文部省、郵政省も含めて国立情報センターを設立しようという案が出ました。その時、私が入所したのはかくいう JICST で、当初は全分野の学術情報収集の着手を視野に入れ、世界中の知的資産を全て国内に入れ、研究者の情報入手を容易にすることを目的としました。しかし、各省の事務連絡会では文部省が真っ先に名乗りをあげ、予算要求もしたのですが、付いた予算は現在でもその形骸があるのか、大学学術局内に情報主任官室という課単位の組織にしか認められませんでした。それを聞いた通産省は怒りを全面的にあらわにし、世界中の学術文献の処理などできるはずもないという答えを突き付けました。情報主任官室ができて、2 番手は通産省が引き受けることになりました。ただ、その頃霞ヶ関の中でいわゆる専門職の人々 (技官) をそれぞれの省庁で事務次官にする組織はなかった。技官のポジションを多少は上げなければならないということを受けて、技官だけの集合体を結成させて科学技術庁が成立しました。通産省としては、科学技術庁の初仕事として国立の情報センターを設立するのに旧大蔵省へ予算要求をさせ、それによって初めて JICST が誕生したのです。

JICST 誕生後、学術会議事務局の課長は後に茨城大学の教授になりました

阿部：やり残したこと

たが、その人からは「お前みたいな奴は一生物陰で横文字を読んで暮らせ」という言葉を吐かれました。私は未就職だったため、素直に「はい」と答え、法案可決後、5月に入所試験を受け、衆議院の第三公邸で面接を受けました。運良く試験に合格し、予算が初めて付いた1957年8月に立ち上げの披露パーティーをしましたが、本格的な仕事が始まったのは同年10月以降でした。その時の定員は60人で、文部省が提案した学術情報主任官室という課長以下5人の組織と比べると10倍以上の規模の特殊法人として誕生したことになります。入所後も課される仕事ができるまで出社できず、その年の11月1日から仕事が始まりました。

## I. 日本科学技術情報センターでの仕事始め

私が仕事を始めた当初、まず企画室に入って大蔵省主計局で事業計画を説明する業務に携わりました。最初のうちは係長に付いて大蔵省主計局に行って事業計画の際に荷物運びとして同行していました。その係長はかつて科学技術庁が人口雪崩の実験を行って予想の3倍以上の雪崩に巻き込まれて亡くなった人でもありました。彼が主計官に問い詰められて返答に困っていた時、私は横から係長の変わりに質問に答えていたので、事務所に戻った後、彼は以降主計官とのやり取りを任せ始めました。

予算はその内示の後、それぞれの省庁が認可予算を編成して大蔵省主計局にその案を提出する工程となっています。しかしながら、大蔵省主計局は出された要求を突き返すことを仕事にしているので、不均衡が多々出てくることがありました。総額で金額の変動がなくとも、細目と仕事との帳尻合わせをして2～3カ月かけて認可予算を打ち出し、その案が完成した段階で3月に翌年度の予算が決定するのです。私が主計局に通っていた時期は認可予算案を決める時期でもあったため、学術情報を世界中から集めて論文単位で国内の研究者に手際良く知らせるという主旨に沿い、学術雑誌を発注しなければなりませんでした。そこで丸善書店と紀伊国屋書店に入手可能な雑誌の一覧を作成して届けるよう依頼して、それをもとに学術

雑誌と思われるものを選び出して発注しましたが、実際には到底学術雑誌とは思えないようなものが多々ありました。その中でも特に私の記憶に残っているのは原爆の惨状について被爆者から聞いた話をもとに構成した阿川弘之『魔の遺産』新潮社、1954年という小説のドイツ語訳が掲載されていた旧東ドイツの総合雑誌 Aufbau で、私は原著が購入できなかったので Aufbau に掲載されているドイツ語版のものを読んでいました。私はよく日本広しといえども阿川弘之の『魔の遺産』をドイツ語で読んだのは自分ぐらいしかいないのではないかと冗談を言ったりもしていました。

ところで、設立したばかりの JICST にいた60人の人たちには誰も学術情報処理経験がなく、何をすれば良いのかわからず途方に暮れていました。そのような時に行われるのは会議ばかりで、社会人1年目の私は記録係をしていましたが、繰り返し会議を行っていても結論が出そうになかったため、世界の先進国がどのように情報を処理しているのか手分けして調査することになりました。私は会議の書記だからこのことには関わらないというつもりでいたら、その時の会議の委員長でもあった小林胖氏（後に慶應義塾大学の教授に）に呼ばれ、どこの地域（国）の調査を希望するか聞かれましたが、その時点ではもう手遅れで、調べ易い国、即ち資本主義諸国の地域は既に全て他の人に割り当てられ、残っているのはソビエト（旧ソ連）のみで、仕方なくソビエトの調査を行うことになりました。その頃私の外国語学習歴は英語とドイツ語の2カ国語で、ロシア語などわかるはずもないと思って困っていましたが、それでも諦めず「ナウカ」という書店へ足を運んでみました。そこで、その書店の店員にソビエトの文献を輸入する際の手続きに関して尋ねましたが、その当時のソビエトはスターリンによる「鉄のカーテン」によって決定的な秘密主義の真っ只中で、文献入手方法が一切わかりませんでした。ただ、特定の時期には麻布のソビエト大使館から文化担当の者が文献リストを持って店を訪ね、指示された本を売っているに過ぎなかつただけであったというので、詳細な情報を掴むには非常に厄介でした。とりあえず事務所に戻って書庫に行ってみると、たまたま2.5

cm程度の厚さの冊子が見付かり、中を見てみると東ドイツ公共図書館の図書館長と大学図書館の図書館長とが31、2人集まってプロジェクト＝チームを結成し、ソビエトの図書館の文献情報活動を視察した時の報告書でした。私はその文献をすみずみまで読み込み、その中に引用されている文献を探すと半分以上がUNESCOの出版物だったのでそれも探し出しました。それらをもとに私は会議でソビエトの図書館の活動を報告し、それはVINITI（全ソビエト総合科学技術情報センター）が中心になっていることも盛り込みました。会議終了後、私は小林胖氏から「今日の報告がひょっとすると大変貴重なものになると思う。今日報告したことを原稿に書いて来なさい」と言われ、400字詰め原稿用紙80枚前後にまとめて提出すると、『情報管理』<sup>1)</sup>という雑誌に3回に分けて掲載され<sup>2)</sup>、それが国会図書館に届けられました。

ところがその前に、JICSTの設置法提出の際に社会党（現社民党）が「政府側の説明によると、資本主義国家の例しかない。社会主義国家の図書館活動の調査を国会図書館に依頼する」と問題提起しました。国会図書館の立法考査局は社会党からの依頼に対して5人のプロジェクト＝チームを編成して調査しましたが、手がかりを全く見出せませんでした。それに当時はソビエト大使館の職員も携わっている国の情勢をあまりとやかく言えなかったのです。立法考査局が何も手がかりを見出せなかったことを社会党に報告した後、私が「ソビエトの図書館」と題して出した論文が掲載された雑誌が届き、私は国会図書館から電話でどのように調べたのか尋ねられ

1) 広島修道大学では、『情報管理』は1968年4月以降のバックナンバーがある。

2) その文献の詳細は以下の通り。

阿部耕一朗「ソビエトの図書館（Ⅰ）」『情報管理』Vol. 1, No. 2, 日本科学技術情報センター, 1958年2月, pp. 9~12

阿部耕一朗「ソビエトの図書館（Ⅱ）」『情報管理』Vol. 1, No. 3, 日本科学技術情報センター, 1958年3月, pp. 5~8

阿部耕一朗「ソビエトの図書館（Ⅲ）」『情報管理』Vol. 1, No. 4, 日本科学技術情報センター, 1958年4月, pp. 1~4

ました。肝心な方法は伝えなかったにしても、その中から引き出した参考文献の8割程度はUNESCOによって英語で書かれた文献なので伝えました。ここから、私の活動は出発していきました。

## II. 大阪万博跡地利用計画

### 1. 主計局との戦いの連続

私はJICSTに勤務していた時、常に自然科学の学術文献のみならずいずれは社会科学、人文科学にも着手しようと考えていました。そのような思いが常に根底にあったか、大阪万博跡地利用計画を検討し始めました。ちょうどその頃、通産省は各省庁に大阪万博跡地利用計画案を最低1つは出すよう通達を出していました。私が科学技術庁を訪ねていた時、1人の官僚が私に利用計画案を考えてもらえないかと声をかけました。私は日頃持っていた夢を含めて、自然科学、人文科学、社会科学全分野の学術情報分析センター設立案を出し、その時の予算を25～30億円にしてはと答えてみました。前述の通達は1968年頃に出されたようですが、その年の9～10月には大阪万博跡地利用計画案を具体的に説明するのにほぼ毎日大蔵省主計局に呼び出されていました。各省庁の案が1つずつ出た時に審議官室に呼ばれて説明に行った際、各省庁の案がまとめられた報告書を受け取りました。その報告書に目を通した私は科学技術庁以外の案を物置小屋に過ぎないと言って失笑しました。私にあまり自由に発言させないようにしたのは実はあの堺屋太一氏で、彼は当時万博担当の係長をしていました。彼はその後も様々な所で講演・執筆活動をしていましたが、万博の本当の成功は理想的に跡地を利用できるか否かであることを考慮して様々な案が立案されていたようでした。

私は各省庁の立案を「物置」で片付けそうになったが、考えてみると私の案も世界中の学術雑誌を集めた「物置」となりかねません。ただ、それが「物置」とならなかった理由はそこで学術文献の研究動向を抽出して分析するということが何よりも念頭にあったからです。それも自然科学系の

## 阿部：やり残したこと

データベースを作成していると、1つのキーワードで的確に必要な文献を出すのに学術用語の新語が豊かな情報を持っていると言えます。なぜなら、学術研究は既存の学術用語を細分化することで新たな学術用語を出すことになるからです。それらを分析すると、どの分野の研究者社会にどの程度の地殻変動が現在進行中であるかが類推できるのです。そこでの「分析」の意味とは、ちょうど万博を開催するのに通産省が富士通、日立、日電三社合同で日本最大の汎用大型コンピュータをつくり、それによって万博の全運用を統制したことによるものでした。私はあの超大型汎用コンピュータを使いこなせる人がいないだろうと思い、それにそのような大きい機械を使うための場所もまだほとんどなかったため、コンピュータが無料で手に入り、万博跡地が国有地であったことに着眼し、学術情報分析センター設立案を出すに至ったのでした。最終的には私の案と梅棹忠夫氏の国立民族学博物館設立案とに絞られましたが、不動産込みの仕事の場合には結局自民党の政調会長が審査し、結果的にはご存知の通り、国立民族学博物館設立案が可決されました。

ところで、私は自民党政調部会長による点検精査の後に主計官から呼ばれ、いつもの調子で部屋に入ると主計官は私に「あんたの案は本当はいい案なんだけどな〜……。君初めからやる気があったのなら自民党の諸議員のおでこぐらいはなでておくべきだよ」と言ったので、私は風向きが変わったのかと考えました。それまで、私はJICSTの総務部長に学術情報分析センター設立案のことで大蔵省主計局に呼ばれていることに気付かれていました。総務部長から何をしていただのか問われると、科学技術庁の案として出した学術情報分析センターの件を説明し、予算規模から建物の概略（及び外観）の図面まで見せると、驚かれて「この予算が本当に付いたら、君殺されるぞ！」と言われていました。彼は私のことを心配して何とか撤退できないかと私に言っていました。尤も、話をしている側は主計官の態度をうかがうと話の内容に賛成しているのかどうかわかるものです。それでも、何とか予算が出るのだから、この期に及んで撤退するとなるとそれま

での苦勞が水の泡となるに過ぎません。まさに「死を覚悟した決断」でもあったのです。同時期、実のところ梅棹忠夫氏は研究者の間では非常に評判が悪かったのです。なぜなら、彼は自民党の陣笠代議士にまで夜討朝駆けをかけたため、誰からも学者ではないと否定されていたからです。例の民族学博物館設立も日本にとっては有益なのですが、今から考えるとやはり学術情報分析センターを設立し、全分野にわたって学術情報の研究動向を分析できる機関があった方が私にとっては望ましかったのです。特に、私が広島に戻って大学で教鞭を取るようになって以来、考える度にあの機関があれば研究者にとって分析動向や技術動向の大まかな流れを知らせることになり、海図を持って航海に出ることに等しくなります。したがって、現在の研究者は海図なしで航海をさせられていると言えるわけです。せめて海図を渡せばもっと効率良く研究を推進できるだろうと私は後から思うようになりました。尤も、それはたまたま主計官が後で大蔵省から海洋科学技術センターの理事に出向で出て行き、もう1度私が別の主計官に2ヵ月半かけて説明する厄介さを乗り越え、責任を果たさなければならないことを考慮して全く話さなくなったことに理由があります。それでも、主計局は次のターゲットを山梨県側の富士の裾野に決めました。なぜなら、そこが当初の筑波研究学園都市の候補地になっていたからです。当時の河野一郎建設大臣がセスナに乗って関東一円を飛んだ時、筑波の荒地を見て研究学園都市をつくるよう指示し、筑波は現在の形となりました。それゆえ、私は学術情報分析センターを設立すべきであったと現在も強く考えています。なぜなら、先程も述べたように、その機関が研究者に向けて研究動向を発信する意味で重要だからです。

よく考えてみると、主計局と議論して予算を付けることは大変に労力と時間とを必要とします。ゆえに、私は後輩たちに将来もこのような仕事をさせるにしのびないと考えた結果、大蔵省へ行って最低7～8年分の予算を請求し、その後一切予算を要求しないことを企てました。その意図としては、東京の都心に超高層ビルを建て、その中に国際会議場や通常学会用



阿部：やり残したこと

の部屋も用意し、それぞれの部屋に学会事務局を全て集め、日本国内中の学術情報を全て集めてしまうことでした。即ち、通信回線で情報を全て一網打尽にすることに等しいわけです。更に、都内のビルよりも大幅に安い賃貸料にし、その収入のみで情報処理作業をするという意図も含まれていました。問題を克服するには、私は特殊法人の中でも真っ先に金融機関を潰すことであると考えていました。なぜなら、各省庁の特殊法人の中には必ず金融機関があったからです。金融公庫を特殊法人として設置すると、少なくとも大蔵省の天下り先を2つは確保することになります。中には不要な金融機関もあり、最も望ましい形としては1つの金融機関の中に各省庁の部門を包括することでした。特殊法人の整理に当たっては、実際に有益なものは決して潰してはいけませんが、公務員同士の利害が一致したことで成立したものは検討を要すると考えていました。現在でも、私は都心に前述のような超高層ビルを建てておくべきであったと考えています。

## 2. 広島での出会い

1970年前後、私の母が体調を崩しかけていた頃、私は熊本県のテクノポリス構想委員会の委員を務め、会議に参加するのに熊本県庁から旅費と日当を受け取り、月1回東京から熊本へ通っていました。当時の熊本県知事は細川護熙元内閣総理大臣でした。熊本へ向かう前夜、私は広島の母の家へ立ち寄り、千葉で一緒に住もうと何度も説得しました。途中1970年代前半から4年前後広島で暮らしていたため、日隈先生やひろしまPステーション代表取締役・岡田晋輔氏、広島商工会議所専務理事とも知り合いになりました。広島で暮らした後、私は東京支所長として再び東京へ戻りました。

前述のような経緯があって私は広島修道大学へ赴任することになったのですが、1974年に広島大学内に国際政治学者である関寛治氏（故人）が広島大学平和科学研究センターを設立し、その初代センター長に就任した時、私は関氏から客員研究員としてそこに誘われました。その後、森祐二先生、松尾雅嗣先生と出会い、関氏を含む3人に学術情報分析センターに関する

話をしました。関氏からは平和研究の分析で情報を読み取ることを勧められ、そのような経緯により、私は森祐二先生、松尾雅嗣先生と共に、広島大学のコンピュータを使って国際平和学会が全世界の平和研究文献の抄録を集めて出版している *Peace Research Abstract Journal* に掲載されている論文の主題の分析を行いました。その結果、数本の論文が生まれました<sup>3)</sup>。それらの論文は後に関氏の著作<sup>4)</sup>に引用されており、森先生・松尾先生との業績はその後の関氏の研究ベースの一角を担うようにもなりました。森先生・松尾先生との研究は松尾先生が論文を英訳してメキシコで行われた国際平和学会で発表しました。その後の反応としては、世界中の平和学会が今後の平和研究情報センターを広島にして欲しいという決議文まで付けました。しかし、それは当時の広島大学の会計担当者が予算化に失敗したために実現されませんでした。

### Ⅲ. 大学内の黒板のスクリーン化

#### 1. 情報センターの誕生

私は1991年に広島修道大学に赴任し、その2年後、当時学長であった藤田真治氏から情報センター設立とその必要性を指摘されました。それに対

3) 例えば、以下の文献を参照。

松尾雅嗣, 森 祐二, 阿部耕一郎「平和研究文献の情報構造」『広島平和科学』Vol. 1, 広島大学, 1977年4月, pp. 1~36

松尾雅嗣, 森 祐二, 阿部耕一郎「学術領域における情報の構造特性 (I)」『情報管理』Vol. 21, No. 1, 日本科学技術情報センター, 1978年4月, pp. 14~20

松尾雅嗣, 森 祐二, 阿部耕一郎「学術領域における情報の構造特性 (II)」『情報管理』Vol. 21, No. 2, 日本科学技術情報センター, 1978年5月, pp. 92~104

松尾雅嗣, 森 祐二, 阿部耕一郎「学術領域における情報の構造特性 (III)」『情報管理』Vol. 21, No. 3, 日本科学技術情報センター, 1978年6月, pp. 157~162

松尾雅嗣, 森 祐二, 阿部耕一郎「文献情報にみる軍事問題研究」日本平和学会編『平和研究』第4号, 日本経営出版会, 1979年6月, pp. 153~164

4) その一例として関寛治編『国際政治学を学ぶ—危機状況打開のための現代国際政治理論のシナリオ』有斐閣選書, 1981年などを参照。

阿部：やり残したこと

して私はもう手遅れなのではないかと答えました。しかし、藤田氏は手遅れであってもないよりは救いがあるのではと切り返したので、私も情報センターがないよりはましであると考えて設立することに決めました。私は当初、依頼をお断りしましたが、JICSTで汎用大型機の使用を経験したことも相俟って、現経済科学部学部長の廣光清次郎先生も先生をお手伝いすると申し出たので、私が初代情報センター長、廣光先生が次長として情報センターを学内に設立しました。また、心理学専攻の松田俊先生も情報センター運営に全面的に協力してくれました。

設立に当たっては、まずキャンパス中に光ファイバーを張り巡らすことを決めました。なぜなら、私も予算編成の仕事に携わってきた経験から、いわば「小さく産んで大きく育てる」方針ではなく、組織の予算編成がその前年の予算規模の定率を枠にすることが常識であるように、予め「大きく産んで大きく育てる」方針を基礎としていたからです。ゆえに、私は「初めにできるだけ規模を大きくしとかんと、後になってからやるようじゃできやせんで。それには光ファイバーを張り巡らすことが第一だ。これがなかったら情報センターとは言えない」と言いました。それによって現在の情報センターの基盤ができ、廣光先生が私立大学情報教育協議会（私情協）の委員を依頼され、全国の私立大学の情報教育施設の充実度に関する調査を行いました。結果としては、法文系の4年制大学の中では本学は2番手でした。私も「阿部さんがやってもその程度」とかつての同僚たちに言われずに済んだと胸を撫で下ろしました。

## 2. 大学内の黒板のスクリーン化

私は様々な体験を通し、初期のネットワーク化とパソコン教室を設立していきました。情報センター長の任期機関、私は頻繁に全国の私立大学の情報センター長を集めた私情協による会議に出席していました。そこで、私は次のステップがおそらく大学の黒板をスクリーン化することを補助対象にするだろうと考えました。1998年、私は情報センター長を廣光先生に引

き継ぐ際に文部省が1993年に学内に光ファイバーを張り巡らしたことを補助対象にし、最高の時点で最も早い時期に学内に光ファイバーを張り巡らしたことになり、学内の黒板をスクリーンに変えることを補助対象にするようなことになればいち早く実行するよう呼びかけました。しかしながらその後、現在もそうなのだが日本経済がますます不況の一途を辿ったため、黒板のスクリーン化まで補助対象が広がりませんでした。このことも私は心残りでした。

#### IV. ユーロ=セントリズムの決算

現代社会は世界中で既存のエトス（倫理観）が崩壊しつつある時代でもあります。したがって、私はここ1年の学部の授業でよくせいぜい200年前後のヨーロッパ社会の歴史のあり方を基準にして考える方法論が世界中で流通しているが、あの中にも誤りが多くあるので、「21世紀」という100年はその決算に割り当てなければならず、そうでなければその次の世紀の人類が共有できる新たなエトスを構築できないと忠告しています。それをしない限り、人間同士の殺し合いはなくなるしないし、あのような無駄なことを絶対にしてはいけません。ゆえに、地球上の全人類が共有できるような新たなエトスの構築には、ヨーロッパ中心型の思考法、即ち造語(?)であるがユーロ=アメリカン=セントリズム（欧米中心主義。Euro-American Centrism）を決算しなくてはならない。私はこの頃よく「21世紀という100年はユーロ=セントリズムの決算期だ」と言いますが、これは全人類の課題となり得るに違いありません。

#### おわりに

第2章～第4章で私が挙げたことはいつかは我々が達成しなければならない課題であります。その一方で、私は現役を退いても、命ある限り、外野の応援団の一員として声援を送り続けます。

良き師、良き友、良き弟子たち（学生を含めて）に恵まれて大変幸せで

阿部：やり残したこと

した。修道大学でも良き人材にめぐり逢えたため、全国の法文系私立大学で第2位の情報センターを設立できました。めぐり逢えた人々全てに感謝すると共に、最終講義を締めくくりたいと思います。長時間、ご静聴ありがとうございました。

(本稿は、藤永達也君が採録した1月9日に実施された最終講義のテープをもとにして、川口慶之君がワープロ入力して編成したものである。)